

今回から「社員心得帳」という本からです

### 自分の働きと給与 By 松下幸之助

あるとき、若い社員の人たちに、大要つぎのような話をしたことがあります。

「僕は、みなさんがご存知のように、この会社の最高責任者として、いちばんたくさんのお金をもらっている。それがいくらかということは、ここでは言わないが、仮に 100 万円なら 100 万円とする。その場合、ぼくの考えでは少なくとも 1000 万円の仕事をしなくては、この会社はなりたっていないだろうと思う。あるいは 1 億円、2 億円の仕事をしなくてはならないだろう。そういう働きができていくかどうかということをお互いに自問自答しつつ、僕は自分なりに一生懸命努力しているわけだ。みなさんについても、それは言えることで、みなさんの月給がかりに 10 万円であれば、10 万円の仕事しかしなかったら、会社には何も残らない。そうなれば会社は株主に配当できないし、国に税金も納められない。だから、自分の今月の働きが、はたしてどのくらいであったかということをお互いに自問自答していき、常に自分に問うていく必要がある。もちろんどの程度の働きが妥当であり、望ましいかということはいちがいに言えないが、まあ常識的には、10 万円の人であれば少なくとも 30 万円の働きをしなくてはならないだろうし、願わくば 100 万円やってほしい。そういうふうな自分の働きを評価し、自問自答して自分の働きを高め、さらに新しい境地をひらいていってもらいたい。そういう姿が全部の社員に及んでいけば、そこに非常に力強いものが生まれてくると思うのだ」

このことは、私はきわめて大切なことだと思います。お互いに毎日一生懸命に仕事をしている。しかし、ただなんとなく一生懸命やっていたらそれでよい、というわけではありません。やはりその働きの結果が、何らかの成果として現われ、会社にプラスし、さらに進んでは、社会に貢献しているということで、あつてはじめて、その働きが働きとしての価値をもつのだと思います。

もちろん世の中にはいろいろな仕事があり、実際は仕事によっては具体的な金額で評価しにくいという場合もあるでしょう。しかし、やはりそういうことを自問自答しつつ、またときには他人にも教を請うて、そうした評価の目安を求め、自分の働きを高めていく努力を、日々心がけていきたいものだと思います。

「自分の値踏みもわからん奴」というやつが一番自分の値踏みができていないと思うのです。

カッコ内を埋めてください。

常識的には、( ) の人であれば少なくとも ( ) の働きをしなくてはならないだ

ろうし、願わくば ( ) やってほしい。そういうふうな自分の働きを評価し、自問自答して自

分の働きを高め、さらに新しい境地をひらいていってもらいたい。そういう姿が ( )

に及んでいけば、そこに ( ) のものが生まれてくると思うのだ

ただなんとなく一生懸命やっているのではなくどうしてほしいと言っていますか？

( )

自分の値踏みもわからん奴は、何が一番できていませんか？

( )